

東博本「浜松図屏風」を旅の記憶の形象としてよむ

飯田 紀久子

現存中世浜松図屏風の里見家本や文化庁本は、六曲一双の大画面に海と浜と松が展開され、古来浜と共に歌に詠まれてきた舟や漁夫などの景物が描かれている。それに対して、東博本は、画面が前景の花鳥部分と後景の浜松図部分に二分され、多くの小鳥や、浜を行く武士の一行と荷運びの男たちといった、歌の世界とは異質の景物も描かれている。

東博本への従来の認識は、図様は浜松図の要素に花鳥画的・風俗的要素が加味されたものとし、画面の二重構造は、花鳥図と浜松図の重ね合わせ、或いは、寝殿造の庭園を想起させる花鳥の空間と浜松図の理想世界を風流の趣向で繋いだものとするなどであった。

本発表では、東博本の浜松図部分と花鳥図部分の景物はすべて「旅」に収斂するものであり、画面の二重構造は「旅」の主題を提示するためのものであること、即ち、東博本は「旅をテーマとした屏風」であることを、下記の三点の理由により主張する。

第一は、東博本の浜の景物は中世の日記紀行文で描写されているものと一致するということである。中世には浜は道であり、旅人は浜の生業を眺めながら旅をした。東博本の浜は中世の浜の実景であり、武士の一行は、十徳の着用と相俟って旅の途次である。浜と武士と旅のイメージの定着は、中世の絵巻などの浜を行く武士の場面などからも推察される。さらに中世の旅の日記や紀行文は、浜の景観に感嘆の声をあげており、その「旅の記憶」が「浜松図」と関わっていると考えられる。

第二は、花鳥の景物は四季の表出であると共に旅と結びついていることである。これらは、野山や海辺・水辺で目にする樹木、野辺に咲いている花、野や里で目にし耳にする小鳥であり、旅の歌に詠まれ、中世の紀行文等にも描写されている景物である。

第三は、浜松図部分を花鳥図部分が下部と両脇から枠のように覆っているという構図である。構図は一見煩雑に見えるが、花鳥の枠を通して浜を見るという安定した構図になっている。この枠に関しては、「高雄観楓図屏風」や「花下遊楽図屏風」等の研究で言及され、前者では、屏風最下端の岩や松が見る者の側に立つ働きをして、これを通して屏風の世界に入っていく、または、額縁となって屏風絵世界の異境性を強調し、それ故に絵の世界での相互の現実感を伴わせるなどの役割が指摘されている。東博本の花鳥の枠は屏風の下半分の大部を占めており、境界というより、その先の旅の世界である浜松図へと誘う役割を果たしている。即ち、中世の浜のイメージ、旅の記憶へと導く装置であると考えられる。

以上、東博本は景物、画面構成の点から旅の記憶の形象として捉えられる。さらに、金で覆われた明るい場面と多くの景物は旅を寿ぐもの、また、旅の安全への祈りをこめるものとしても読み取れるのではないだろうか。